

北野博美の大正時代

——折口信夫への運びき道程②

内 海 宏 隆

3 「變態心理」——中村古峯への接近から 独立まで——【大正七年】

この年の「秋田日記」に北野は二度登場する。

二月九日 佐藤君と二人で「愛人社」をおこした北野君を訪い、座に白鳥省吾君もいて夕方まで雑談した。民衆という観念について議論をしたりした。

三月十九日 北野君にあい、将来の相談にあずかった。ぼくは甲州へ帰ってゆつくり勉強することをすすめた。

この年秋田雨雀は35歳、押しも押されもせ

ぬ劇作家として世間で名を成している。《北野》は弱冠25歳。まだまだ血気盛んな青年時代にある。佐藤誠也とともに「愛人社」なる結社を興す。（「愛人社」の会合に同席した白鳥省吾（明治23・2・27—昭和48・8・27）は「民衆派」詩人。早大英文科卒。『ホイットマン詩集』の翻訳（大八刊）『民主的文芸の先駆』（大八刊）『現代詩の研究』（大八刊）などの評論集がある。この少し後の大正十年九月に佐々木孝丸らが「種蒔く人」を創刊した際には秋田雨雀、有島武郎、馬場孤蝶、福田正夫らとともに「特別寄稿家グループ」の一員として名を連ねている。《佐々木孝丸『風雲新劇志』41ページ 現代社 昭和34》）しかし結社運営はうまくいかなかったようである。一と月ちよつと後には「将来の相談」を秋田にしている。秋田は「甲州へ帰」ることを勧めている。いうまでもなく「甲州」は《北野》の妻・千加の郷里である。《北野》に帰るべき故郷があるならばそれは福井だ。秋田が「甲州へ帰」ることを勧めたのにはそれなりの理由がある。『北野の妻の実家ならば裕福であるから婿一人くらい養う

のはわけもないだろうし、それが将来に繋がる学問であれば許してもらえるだろう」といつた秋田の思惑がそこから伝わってくる。

「高崎年譜」によれば福井商業学校中退というほとんど学歴らしい学歴をもたない《北野》は生涯それを誇りとしていたらしいが、いざなにかを本格的にやろうとすると逆に(学歴のないことに)足を掬われてしまつてたちまち頓挫してしまつようなところがあつたようだ。秋田雨雀は《北野》のそんな弱点を見抜いて「ゆっくり勉強することをすすめた」のだろう。しかし25歳という年齢からいって・あるいはこの時既に一児の父親でもあつた(註7)《北野》にとつて今更学窓に逆戻りして年少者に混じつて講義を受けるなどということとは思ひもよらぬことだつたのであるまいか。(結果論的にいうとこのち

るなどということとは彼のプライドが許さなかつたのではあるまいか。しかし学歴のないことは結果として生涯にわたり彼を苦しめることとなつた。斎藤昌三は著書『36人の好色家』の中で「彼の力はそれら(性研究)をすすめるには余りに貧弱であるところに、彼の非常な悩みと煩悶があつたことが察せられる」と語る。また《北野》の「無能力と人知れぬ虚栄」を鋭く指摘してきている。(《北野》が死後こんなふうにも埋もれてしまつた原因の一つには大学を卒業していなかつたことがあげられよう。当時は学歴など今ほど重要視されていなかつた(逆に軽蔑されていた風もあつた)時代であり(現場主義とでもいおうか)所謂「叩き上げ」で世間を渡り歩く人が少なかつた(先に上げた安成二郎なども秋田県の大館中学中退だし、《北野博美》の従兄たち吉田元・滝沢豊らも学業半ばにしてジャーナリズムの世界に入っている。《北野》もその口である。文学界・芸能界・実業界などの各方面に顔の広い《北野》だったが、死後彼のことを正しく語り伝えた者はほとんどいなかった。(折口門下として)国学院なり慶応

なりを卒業していたら、《北野》は最古参の弟子の一人として後輩諸氏から珍重され、死後もっと顕彰されたのではあるまいか。不幸中の幸いは西角井正慶や高崎正秀といった国学院側の折口門下が《北野》の功績を称える小文を遺しておいてくれたことだ。これらの手掛かりがなかつたらおそらく拙稿は絶対成立していなかつたと思う。)

さて大正五年以降、上京後の《北野》の行動を資料を元にしてなるべく精確に追つていこうと思ふ。現在のところ「秋田雨雀日記」の他で《北野博美》の名前を確認できる一番古い資料は(前出した)「變態心理」(第二卷第七号)の「第一回變態心理學講習會全科目出席者」名簿である。

市内小石川區雜司ヶ谷五二 早稲田文學士
北野博美氏

「第一回變態心理學講習會」は「斯學普及の目的を以て」大正七年四月二十一日より一週間開催されている。北野はこの年25歳である。「早稲田文學士」という《北野》の肩書

はここで初めて目にしたものであって「高崎年譜」にある「県立福井商業学校中退（以後学歴なし。これをまた常に誇りとした）」という叙述や斎藤昌三「交遊録」に見られる「大した学歴はなかった」という記述に反する事柄である。《北野》は早稲田大学に籍を置いたことがあったのか・なかったのか（なかったとすればこれは嘘言）。学籍はなくともいくつかの講義の聴講生であった・あるいは中退した事実を隠していた、さまざまの憶測は可能だ。（註8）「性之研究」（第一巻第三号・一一三ページ）に「早稲田大学人性道德研究会々則」が一面を使っている。

第一條 本會ヲ早稲田大學人性道德研究会ト稱ス

第二條 本會ハ人性道德ヲ研究シ實生活ト道德トノ調和ニ資スルヲ以テ目的トス

第三條 前條ノ目的ヲ達スルタメ毎月二回早稲田大學内講堂ニ於テ研究会ヲ開催シソノ都度講師ヲ聘シテ擔任トス

（中略）

第一一條 本會ハ左記ニ事務所ヲ置ク

東京市外高田町千登世三七番地
早稲田大學人性道德研究会事務所

顧問 北野博美 創立者 立島仙堂 創立者

津田由雄 幹事 古澤繁市

以下「本會囑托講師」として早稲田大学教授の五十嵐力、医学博士羽太鋭治、早稲田大学講師吉田源次郎・田中王堂・早稲田大学教授武田豊太郎、「変態心理」主幹文学士中村古峽、早稲田大学教授中桐確太郎、文學士寺田精一、秋田雨雀、早稲田大学教授北吟吉、「性之研究」主幹北野博美、文学士菅原教造の名前が挙げられている。そして「從來の研究項目」として14の項目が挙げられているがそのうちの七つは《北野》のものである。「從來の研究項目」に（大正七年五月以後）という断り書きがあるのは会の実際の始動がそのころからだったことを物語っているよう。事務所の住所として掲載されている「東京市外高田町千登世三七番地」は雑誌「性之研究」の奥付にある印刷兼編輯者北野千加並びに発行所「性之研究会」のもと同じである。「早稲田大学学報」（第二九七号 大正八年十一月十日発行）付録の「早稲田大学報告」の第十二項「各種の会合」欄には35の校友会と31の學生研究会が掲載されている。「人性道德研究会」の名は「學生研究会」のひとつとして確認できる。學生研究会は「學生の正科以外の研究に資し且師弟の交誼を親密ならしむる為め講師或は先輩名士を聘し」て開かれる会合として大学当局より認められていた。「早稲田大學人性道德研究会」は大正八年の時点で一応大学当局の公認団体だったようである。（しかし大正七、九年度版「早稲田大学報告」に「人性道德研究会」の名称を見つけたことはできなかった。）「人性道德研究会」は（新井氏も言われるように）「ともかく文芸界や芸能界にも知人が多かった」（《北野》ゆえに作る事が可能だった多分に私的な要素の強い団体だったのだろう。（大正九年二月七日付の「雨雀日記」には「正午から早稲田大学へゆく。「将来の芸術に於ける『性』の位置」という講演をした。帰りに北野君のところにより、性慾の問題、女性問題

につき、まじめな話をした。(早稲田大学人性道徳研究会の講演をはたしたので愉快であった。)という記事があり、この会の実際の活動状況の一端を知らせてくれる。しかしこの講演の記録も「学報」には掲載されていなかった。大学当局に対して届け出のないまま講演会は催されたのか。あるいは報告の時期が遅かったのか。「會則」に謳ってあるように実際「毎月二回早稲田大學内講堂ヲ於テ研究会ヲ開催シ」ていたかどうか疑問が残る。

またこの年《北野博美》は「早稲田大學人性道徳研究会」と並行させて、中村古峽主宰の「變態心理」へと接近している。雑誌「變態心理」主宰中村古峽とはなにか。「新潮日本文学辞典」によれば「なかもらこきょう 明治二四・二二〇—昭和二七・九・

一四(一八八一—一九五二) 小説家、医師。本名翁(しげる)。奈良県生まれ。東大英文科卒。しばらく『東京朝日新聞』記者を勤め、夏目漱石と交渉をもち、小説『殻』(大二刊)を書いた。大正六年『變態心理』を創刊。昭和三年東京医専を卒業して開業。『變態心

理の研究』(大八刊)、『大本教の解剖』(大九刊)、『少年不良化の径路と教育』(大一〇刊)などがある。」とある。中村と《北野》とはどこで繋がったのか。そのあたりのいきさつは広瀬千香が「山中笑翁片影」(『山中共古ノト』第二集)で説明してくれている。

大正七年ころ、品川御殿山にお住まいの中村古峽氏は、「變態心理」を刊行してみたが、北野はその雑誌の編集をしてゐた。古峽氏は帝大文科の出で、初めの頃は文学を志し、小説「灰燼」(?)を発表してゐるが、變態心理の研究にはいり、後には治療上、改めて医科を修めて、千葉で医者となった方である。品川の時代、北野は中村氏の親友菅原教造氏に紹介された。

広瀬千香によると《北野》は菅原教造の紹介で「變態心理」編集に携わることになったという。菅原教造は明治十四年新潟県生まれ、同40年東京帝国大学文科哲学科(心理学専攻)卒業後、大正七八年ころは女子英学塾(現在の津田塾)・東京美術学校・東京高等師

範学校・東京高等女子師範学校などで心理学の講師を勤めていた男である。田中王堂とのつきあいの延長線上に菅原教造はいたものと思われる。この人が三宅雪嶺の主宰する「女性日本人」の編集に携わり、広瀬千香に原稿を依頼した(註9)ことは千香女の発言に明らか(註10)である。私の調べた限りでは菅原には戦後服装文化関係の著作が一二あるばかりで、残念ながら北野との邂逅や「變態心理」での活動などを著した記録は見つけられなかった。

ともかく《北野》は「第一回變態心理學講習會」以来この会へ積極的な係わりを持つことになる。そもそも「變態心理」とはいかなる雑誌なのか。「變態心理」創刊号(大正六年十月十日発行)の「発刊の辞」にはこうある。

精神と肉體とは一枚の紙の表と裏とのやうな關係に立つて居ります。全然同一の物でないまでも、切り離して別々の物にすることは絶対に出来ません。そして大抵の場合に於て、所謂精神上の故障は肉體上の故障を伴ふものであり、所謂肉體上の疾病は所謂精神上の疾

病であります。少くとも此二つの物は、つねに互に原因結果の關係を有ち合つて居るのであります。

されば肉體的なると精神的なるとを問はず、苟くも疾病に關する原理の闡明及びその適用に志すところの人々は、すべて皆精神上故障もしくは精神上疾病に關する根本的研究を度外視して置くわけに行きません。これまでの人々が輕視して來たごとく、これから先きも輕視して行くといふことを許されません。

ところで、精神上故障もしくは精神上疾病の根本的研究といふことは、所謂變態心理學の領域に屬して居り、しかも其領域の内の最も大なる部分を占めて居るものであります。

即ち私共が日本精神醫學會の事業として、第一に先づ此月刊雜誌「變態心理」を發行し、一面、精神醫學の建設と大成とに礎石を据え、他面、一般に變態心理學の發達及び普及に幾分の貢獻をいたしたいと思ひ立つた所以であります。(以下略)

「變態心理」第壹卷總目次から幸田露伴が「支那に於ける靈的現象」を、第貳卷總目次

から柳田国男が「幽靈思想の變遷」をそれぞれ寄稿していることがわかる。そのネーミングからとするとエログロナンセンスな内容を想像してしまう向きもあるが、實際は自然科学(医学方面)から人文科学(文学)に至るまで幅広い学問範囲で人間の心理を研究していることといった極めて真摯な指向性をもつた雑誌なのである。「変態」という言葉を『広辞苑』で引くと第一義として「かわつた形態。正常でない状態。」とあり、俗にいうところの「変態性欲の略」という意味は第五義ではない。この雑誌名とともどちらかといえば「常態」の対義語、「異常」「超常」といった意味合いで「変態」なる語は用いられているものと思われる。今でこそ諸学問領域間の「越境」やコラボレーションなど珍しいことではないが当時としてはそれまでとかく一元的で交差融合することのなかった「精神」上の問題と「肉體」上の問題を併せて考えてみようといったことは画期的な試みであったのだ。単にそのフィールドは精神医学の範疇にとどまらず、現在で言うところのオカルト・怪奇現象・超常現象といったものや、

一つの国や地域に伝わる心意伝承など民俗学/民族学延いては文化人類学の領域までも含み込んだ「こった煮的なもの」であった。「朝日新聞記者」時代に培ったジャーナリストイックな感性と「東大英文科」「東京医専」の文理両方を卒業し「小説家」「医師」の二つの肩書をもつ主宰者中村古峽の試行性が相俟つたところでこの「變態心理」なる雑誌は刊行されたようだ。新井氏にこのへんのところをお尋ねしたところ「『變態心理』の用語は不当で用いないでほしい。彼は心理学を性の研究に應用した先駆者であった。」と《北野》を弁護されている。「『變態心理』の用語は不当で用いないでほしい。」と新井氏がおっしゃるのは「變態」という言葉の響きがわれわれ現代人にもたらす卑俗なイメージを配慮されたことと思われる。(本稿をお読みいただいている諸賢に限りそのような誤解はもちろんありえないと思うが。)

「變態心理」大正七年七月号は大正七年四月二十一日より一週間に亘つて開催された「第一回變態心理學講習會」に《北野》が参加したこと、他、六月十六日に品川御殿山中

村翁宅にて開かれた「第二回變態心理談話會」で彼が「戀愛期に於ける變態心理」と題して「講談」をしたことを教えてくれる。翌月の「變態心理」(大正七年五月号)には森川石抹なる記者の手になる「第二回變態心理談話會雜感」が掲載されている。

北野氏の『戀愛期に於ける變態心理』と題してお話は、氏も劈頭に何かお断りがあつたやうですが、あれは寧ろ戀愛の常態心理であつて、若し題の如くんば、色情倒錯の心理、即ち性慾對照の變態たる同性愛、半陰陽及び性慾目的行為の變態たるフェティシズムス、ザデイスムス、マゾヒズムス等に就いてお話しがあるのかと思つてをりました。／兎に角氏の性慾研究は、其の材料をモル、エーリス、ホーレル等に依つて求められたものが多いやうに窺はれました。さうして當日提出された幾多の材料の、聴衆に取つて最も趣味あり最も有益なものであつたことは感謝に堪へません。／其のお話のうちに、性慾亢奮は満月と關係してゐるといふことがありました。あれはペリコステの説をお採りになつたものと

内海 北野博美の大正時代

思ひます。ペ氏は月經の時期は新月及び満月が非常に影響すると言つてをります。其の理由に就いてはペ氏自身は説明してゐないやうですし、私はそれを證明すべく何等の資料をも有しないのであります。／就きましては、私は常に不思議に思つてをることがあります(中略)……月經、性慾亢奮分婉、死亡などが、月なり潮なりに關係することが經驗的にでも事實とすれば、まことに不思議なことではありますまいか。(中略)從來迷信として一笑に附されて來た中にも、意外にも科學的根據を有するものが間々ありますから、現在の常識で解せられないことは、頭から迷信なりとして片附けてしまふのは如何なるものかと思ひます。此の點に於てペリコステの説や俗間に傳へらるゝ『潮時』の關係に何か説明がつきはしないか、或は全く迷信として葬るべきものか、北野氏始め先輩諸氏の御教示を仰ぎたいのであります。

(おそらくは幕末の大博徒一の子分にその名の由来をもつてあろう)森川記者もまた『北野』の談話内容を「色情倒錯の心理、即ち性慾對照の變態たる同性愛、半陰陽及び性慾目的行為の變態たるフェティシズムス、ザデイスムス、マゾヒズムス等」「變態性欲」に關するものと勘違いしていたやうだ。しかし『北野』の「談話」は「モル、エーリス、ホーレル」「ペリコステ」等の學説を下敷きとした極めてニュートラルなものであつた。「モル」とはおそらくアメリカの人類學者社會學者モルガン(Lewis Henry Morgan 一八一八—一八八二)のことであらう。「エーリス」はイギリスの心理學者 Henry Havelock Ellis(一八五九—一九三九)のこ

とで著書に「性心理の研究」「性本能の分析」などがある。ホーレル August Henri はスイスの精神病學者、昆虫學者。脳および神經の解剖、催眠術の研究、犯罪者の精神医学などの諸方面に大きな業績をあげた。(ペリコステについては不明。)当時の『北野』が性の研究に際して人類学・社會学・心理学・精神医学などかなり幅の広い範圍に取材していたことが伺える。

「變態心理」十二月号では「性慾衝動の精神生活に及ぼす影響」と題された四〇〇字詰

原稿用紙に換算して三〇枚程度の論文を掲載するに至っている。(この時は何の肩書もな

の周辺に集まってきた芝居好きな学生や役者志望の若者たちの一人ではなかったかと思われ。

ている。「變態心理」(第四巻第六號 大正八年十二月)の「編輯の後に」には以下のよ

くただ北野博美の署名のみ。)そして十二月号の巻末「本誌新年號豫告」には「香具師の

「變態心理」第四卷(大正八年六月〜十二月)総目次を見ると

らく《北野》のものであろう。

群集心理應用手段」という表題を掲げている。(閲覧させていただいた慶応義塾大学メディア

《研究》賣笑婦の生立と地方的風習(賣笑婦心理研究―其六)

諸君に向つてこの最後のおたよりに書きながら、記者は詩人的の氣持になつて、じつと

アセンターでは「變態心理」第三卷 大正八年一月〜五月までが欠本状態。筆者未見。)ここで注目したいのは《北野》の肩書が「本

《雑誌》頁(ママ)季の犯罪と性的衝動(性的現象の一觀察―其五)

い一年でありました。編輯者として經營者として、いろ／＼筆紙に盡されぬやうな苦しい

誌記者」となっていることである。どうやらこの一年間の盛んなアタックが功を奏して

裸體畫を眺めつ、(性的現象の一觀察―其六)

思ひを重ねて來ました。餘り一般的に知られてゐない變態心理學の普及といふことを目的

《北野》は大正八年より雑誌「變態心理」の編集スタッフに入れてもらえたようである。

婦人解放論と男性の悩み(性的現象の一觀察―其七)

としてののであるから、たゞ専門學者の機關となるばかりでなく、廣く一般の人にも

4 「性之研究」創刊へ【大正八年】

大正八年十一月十七日付の「秋田日記」には「夜、北野君夫妻、立島、津田、北野夫人

姦婦殺しの話(性的現象の一觀察―其八)

も讀んで貰ひたいといふ點に於て、取材の範圍を極めて廣く自由に、さうして研究と趣味

妹なぞといつしよに浜田君を訪い、トラムプの相手になつた。」という記事が記されている。

其九) A君の話(性的現象の一觀察―其十)

とを併せ兼ねるやうにと、いろ／＼の努力を傾けて來ました。今から振り返つて見ると期待

る。「立島、津田」とは「早稲田大学人性道徳研究会」の「創立者」「立島仙堂、津田由

などを執筆している。第四卷の奥付ではこれ(第貳卷)までは「編輯兼發行者中村翁 印刷者 土谷清隆」となつていたものが「編輯

の半分も實現されてゐないのは赤面の次第であります(以下略)

雄」の二人を指すのだろう。「浜田君」については不明。おそらく彼らは当時、秋田雨雀

兼發行者中村翁 印刷者北野博美」と変わった

これらの文章から伺い知れることはおそらく《北野》は大正八年初頭より雑誌「變態心

理」の一記者というよりも「編輯者として經營者として」ほぼこの雑誌の全権を中村古峽より委ねられたのではあるまいかということだ。「變態心理」大正八年十二月号掲載の白楊生「大本教徒の心理解剖」は非常な好評を博し、翌九年より雑誌を挙げて大本教バツシング・キャンペーンを始めるきっかけを作った。（「前號の白楊生の大本教攻撃は實に痛快でした。お蔭で眼が醒めたと云つて、わざわざ書を寄せられた名士がありました。皆様からも盛んな御聲援を賜りましたので一層勇氣が百倍して居ります。」「編輯の後に」『變態心理』大正九年一月号）雑誌主宰の中村自身「大本教の迷信を論ず」と題する論文を七年七月号に載せて先鞭を切り大正九年には『大本教の解剖』を刊行している。（『變態心理』大正九年十二月号「編輯の後に」に「主幹の著書もお蔭で好評を受けました」とある。）中村古峽自身雑誌作りとは別に作家としての執筆活動もありそちらのほうが多忙を極めたためか、結局「變態心理」の全権を『北野』に委ねることになった。

内海 北野博美の大正時代

「變態心理」（大正八年十月号）「編輯の後に」に『北野』はこんな記事を載せた。

■此の欄で私事を申すのは恐縮ですが、今度私は「性の（ママ）研究」と題する性慾研究の雑誌を發行することになりました。このことに就いては前號の本欄で他の記者から一寸紹介して置いてくれましたが、早速御賛同下さった諸君の非常に多かつたことは私の深く感謝する次第であります。たゞ茲にこれらの諸君に對して申譯なく思つて居りますことは、發行の遅延したことです。本月十日頃までには必ず發送出来る豫定ですから、此段お詫び旁々御通知申して置きます。

しかし「性之研究」創刊号與付をみる限り「本月十日頃まで」の約束はどうやら守られなかつたようである。「性之研究」創刊号與付には「大正八年十二月十二日印刷・同月十五日發行・編輯兼發行者 東京市外高田村千登世三十七番地 北野千加・發行所 東京市外高田村千登世三十七番地 性之研究会」とある。「性之研究」の創刊はこれより更に二

カ月遅れたことになる。「東京市外高田村千登世三十七番地」は『北野』が前年七月に「市内小石川區雜司ヶ谷五二」より転居した先である。（『變態心理』大正八年七月号「編輯の後に」）

最もその兆しのようなものを「變態心理」の記事に見て取ることはできる。例えば大正八年八月号の埋め草に「私はこれまでも性慾上の問題に就いて種々研究して見たいと思つて居りました。今後も熱心に眞面目に勉強する積りであります。それで、若し諸君の中にこれに關係のある經驗、實例、その他、地方々々に於ける結婚、出産、并に男女關係上の風習、信仰、傳説等、お氣付きの點がありましたら、お知らせを願ひたいと思ひます云々。」という記事を載せている。これなどは明らかに来るべき新雑誌創刊への下準備である。（この記事から『北野』の興味の対象は今日の民俗学でいうところの周期伝承・口誦伝承・心意伝承などの領域にあたるものであったことが解る。最も「民俗学」という学問分野も確立されず、皆暗中摸索で自分の興味・関心の対象を追いかけていた時代のこと

であり、こうした分析はあくまでも結果論的なものに過ぎないが。）

また十一月号「編輯の後に」には「中村主幹、北野編輯長兩人は、十月十三日から五日間甲州方面の旅行に出かけ、御獄の仙境を、岩崎の葡萄園等を視察して大いに頭の洗濯をして来た。」との報告がある。甲州は《北野》の妻の実家のある場所である。《北野》は近い将来に考えている「独立問題（暖簾分けのお救しを得るため）」の話を切り出すために中村を「甲州行」に誘ったのではあるまいか。

「變態心理」（大正九年一月号）の「新刊紹介」に「性の（ママ）研究」（創刊號）の書評を読むことができる。

本誌同人北野君の新雑誌も大變遅れましたが、漸う出来しました。菊版四十頁、僅かといへば僅かですが、自然界に於ける性の生活から、性慾と迷信、戀愛講座、聖書や佛典に現れた性の問題近代文學や神話に現れた性の問題などと、あらゆる方面の研究を網羅し、それを同君獨特の筆に書きこなして、趣味豊

かな編輯振りを見せてゐます。「本邦唯一の性慾研究雑誌」と銘打つたのにも見ても、同君の確信を知ることが出来ませう。（一部定價廿六錢 市外高田村千登世性之研究會發行）

5 「性之研究」の刊行【大正九年】

「變態心理」（大正九年三月号）の「編輯の後に」では「（前略）氏の雑誌『性之研究』は其後非常に好評で、四版を發行する運びになつたさうです。第二號も近く出来るさうです。」とある。また「變態心理」（大正九年六月号）の「編輯の後に」では「同人の北野博美君を相變わらず健在です。『性之研究』も大發展をして、同君の鼻息は當るべからずです。」とある。（筆者が日本大学総合学術情報センターで閲覧させていただいた「性之研究」創刊號は「大正九年五月三十日發行」の「第五版」であり、第貳號は（発行日は上に同じの）「第三版」であった。これらはこの雑誌の実際の売れ行きを示す徴とならう。）

「性之研究会」「早稲田大學人性道德研究会」双方について言えることはこれらの研究モチーフに「性」の問題があるということだ。《北野》はいつごろから「性の問題」に興味を持ち始めたのか。またなぜこうしたことと興味を持ち始めたのか。「賣淫研究」という雑誌を《北野》はのち大正11年10月に創刊することになるのだが、その宣伝記事に「北野博美十年の研究成果」という謳い文句がある。なにぶんにも宣伝文句なので誇張はあるかもしれないが《北野》の性の研究は逆算すると大正初年（1911）ころ（北野18歳）のころより始まったものと類推できる。なぜ《北野》の興味の対象は「性」でなければならなかったのか。《北野博美》の「キタ・セクスアリス」は自身の口から語られることはなかった。北野兎氏に伺ったところ「売淫研究への志はロシア文学耽読中に醸成されたかなど想像いたします」。「アルツイバーシエフの性愛の解放の小説、淫売婦の生活を描いたクプレーンの『魔窟』などはよく読んでいます」というお返事をいただいた。小説を日本が受容したのは明治も末のことだ。『日本近代文学大事典』（第四巻 事項 昭和52）には明治43年5月に昇曙夢の第

二翻訳集『露西亜現代代表的作家六人集』が易風社より刊行されて、「当時の文学青年たちに大きな影響を与えた」と記してある。『六人集』に「収められたのはバリモント『夜の叫び』、ザイチェフ『静かな曙』、クーパーリン『閑人』、ソログロフ『かくれんぼ』、アルツイバーシエフ『島』、アンドレーエフ『霧』といったチェーホフ以後の新しい小説であった」という。「明治・大正・昭和翻訳文学目録」(国立国会図書館編 風間書房 昭和34)を見ると大正末年から昭和初期にかけてアルツイバーシエフ・クーパーリンともに膨大な数の訳書がでていることがわかる。明治末年北野は十代後半の最も多感な時期にあたりこうしたロシア文学ブームの影響を受けていたとしてもおかしくはない。「後年も父はルバシカなどを着ては悦にいつていました」と晃氏は語ってくれた。

また『明治大正昭和世相史』(社会思想社82)にあたると「大正3年12月」の頃に「安田皐月『生きる』と貞操」、小倉清三郎『性的生活と婦人問題』発売禁止される(このころから『貞操』、『性』について大胆な発言がおこなわれはじめる)」という記述があり、雑誌「變態心理」並びに「性之研究」の創刊された大正という(厳格なイメージの強い明治とは違った)モダンで解放された新しい時代の風をいくらかでも感じることができると。斎藤昌三はその著「36人の好色家」の中で『北野』のことを「性研究陰の元祖」と呼び、雑誌「性之研究」を「この種のものとしては先駆の方」として認める。また大藤時彦は「北野さんは大正時代に『性之研究』という雑誌の主幹をされ性の研究者として知られていた(中略)私の学んだ学校の掲示場によく氏の講演のあることが告知されていた。」と当時を物語る。(『北野博美さんの業績』「臨川書店『年中行事』内容見本) これらを『折口遼返以前』の『北野』に対する社会的評価の一つとして記録に留めておきたい。

「性之研究會設立趣意書」の中に『北野』の趣意をたどってみたいと思う。

性乃研究會設立趣意書

性の問題が、人類の個人的乃至社會的生活上極めて重大な意義を有してゐることに就い

ては茲に多くを述べるの必要はないであらう。本邦に於ても、近時これが研究の必要を説く者漸く多きを見るに至つたが併し不幸にして今日までは、これが研究の機關なく且自ら進んでこれに従事しようとするものも極めて少なかつた。本會の設立は正に如上の缺陷を補はんが爲めに外ならないので、飽くまでも眞摯な態度で本問題の研究に従事すると同時に併せて雑誌「性之研究」を刊行して廣く研究者の便宜とし、且は之れが知識の普及を計らうと思ふのである。幸ひにして本會の意のある處世人に認められるならば、それは單り吾曹の満足たるばかりではない。

大正八年九月

とかくこれまで蔑まれたり・隠蔽されがちだつたりした「性」に関する問題を「飽くまでも眞摯な態度を以て」「研究に従事する」という『北野』の積極的な態度・意欲的な姿勢が感じられる。筆者は「變態心理」大正八年八月号の埋め草に「兆し」を読み取つたがそれよりもっと以前に『北野』の腹は決まっ

ていたのではあるまいか。《北野》が雑誌「性之研究」並びに「性之研究会」でやろうとしていたことはどんなことなのか。「性之研究」創刊号につけられた「性之研究会會則」に《北野》のウィジョンを伺うことができる。

細則

- 一、研究会ハ毎月第一日曜午後一時ヨリ東京神田區一ツ橋學士會事務所ニ於テ開催ス但會員及ヒ其ノ家族以外出席ヲ禁ズ
- 一、性的煩悶ノ相談ハ一件ニ付き一圓、手紙ニテ應答ノ場合ハ其倍額トス但本會會員ニ限り總テ其半額トス
- 一、本會會員ハ本會刊行ノ圖書ハ總テ一割引ニテ購入スルコトヲ得
- 一、本會ハ時々「特殊研究録」（非賣書籍）ヲ刊行シ、實費ヲ以テ會員ニ頒ツ

参考

- 一、月刊雑誌 性之研究 一冊 參拾錢 郵税五厘
- 一、月刊雑誌 戀愛講座 (LECTURES on LOVE)

一年分四圓八拾錢（本會々員ニ限り四圓五十

錢）

（中略）

北野博美氏著作目録

- 一、宗教的戀愛の研究 定價五拾錢
- 一、世界における性的生活の不安 定價（貳圓貳拾錢）

一、賣淫研究 印刷中

（以下近刊として「世界賣淫史」「未開國の賣淫的風習」「文明國に於ける賣淫」「日本賣淫史」「賣娼婦の研究」「性慾學講話」が挙げられている。）

これらの記録より伺える「性之研究会」の主なる活動は、雑誌「性之研究」並びに「戀愛講座 (LECTURES on LOVE)」の月一回の発行、そして「毎月第一日曜」に開かれる研究会にあつたようだ。その活動内容が極似していることから、《北野》が中村古峯主宰の「變態心理」（日本精神醫學會）の活動の中で培った様々なノウハウを借用したものであると思われる。その他に《北野》は様々な著作の刊行を目論んでいたことがわかる。「性的煩悶ノ相談」とはおそらく明治四一年淺草密藏院内に設立された「煩悶引受所」や澤田順次郎が大正初期に行っていた読者相談受付などにヒントを得て作られたものだろう。（明治四一年九月二〇日の『都新聞』には、まだ出来てから日が浅いにもかかわらず毎日のように淺草密藏院「煩悶引受所」に一〇人以上の人が訪れ、住職松田密信師を初め、その他の役員もその応接に忙殺されている様を報じている。煩悶の内容は大部分が生活問題、三分が恋愛問題で、特に女子の相談事はすべて恋愛問題だったという。これらの流行に《北野》は乗じようとしたのではあるまいか。）

「性的煩悶相談所開設」のお知らせが「賣淫研究」第一冊（「性之研究」第三卷第三号・大正十年八月）に出ている。《北野》は新聞記者時代に培ったノウハウに加えて雑誌「變態心理」編集を通じて様々のスキルを学び、また學術専門家たちとの接近・交流を深めて「独立」の下準備としたのではあるまいか。こうして見てみると裸一貫福井より上京してきた一地方ジャーナリスト《北野》という男に進取の気性じゅうぶんだった様子が伺える。あるいは大正八年後半あたりから色濃く現出

した大本教バッシングの編輯方針に《北野》は疑問を感じていたのかもしれない。自分のやりたいこと以外のこともやらねばならないことにジレンマを感じつつ、《他人の母屋》¹⁾「變態心理」で《廂》を借りていた（編輯者をしていた）《北野》は《母屋》を盗るわけにもいかず独立を決意したのではあるまいか。《北野》は「變態心理」第六・七號（大正九年一月・十二月）に全18編の論稿並びにエッセイを載せ、大正九年十一月号で編輯者の座を笠間音次に譲っている。

「變態心理」大正九年十二月号「編輯の後」にはイニシャル(K)の署名入り（おそらく新編輯者笠間音次のもの）で次のようなことが述べられている。

□同人北野博美君は、従来の「性の研究」の外に、今度又新に「戀愛講座」を發刊されることになつて、非常に多忙になられたので、本誌の編輯は先月以來白楊生が當ることになりました。（「白楊生」は「變態心理」大正八年十二月号「大本教徒の心理解剖」で非常に好評を博した「やり手」編集者である。）

「性之研究」元年の大まかな流れを掴んだ

ところで雑誌の様子も少しだけ見ておきたい。「性之研究」は大正九年七月・第六号をもって第一巻とされた。医学博士羽太銳治による「精囊の年齢的研究」の他はほとんど《北野》の手になる原稿であり、《北野》の個人雑誌と言つてもよかつた。七月「性之研究」特別号として「性的行事としての盆踊の研究」を刊行。（《北野博美》は後に大著『盆踊りの研究』を企画しており、この「性的行事としての盆踊の研究」はその端緒となつた論文と思われる。）

「性之研究」第二巻は大正九年九月・十年二月までに六号五冊を刊行（第五・六号が合併号のため）。特筆すべきことは南方熊楠より左記四編の寄稿を得ていることだ。

孕石の事（上）

第二巻第二号（大正九年十月）

孕石の事（下）

第二巻第三号（大正九年十一月）

「孕石」の譯語に就いて

第二巻第四号（大正九年十二月）

東洋の古書に見えたキッス

第二巻第五号（大正十年三月）

その他にもイワン・ブロッホ、ハヴァロック・エリス、ヴェッキ、ペリコステなど海外の学者たちの論文の翻訳や、嵯峨潤による四回連載「近代文學に取扱はれたる性の問題」などが掲載され《北野》の個人雑誌色を払拭しようという努力が払われている。



秋田雨雀はこの年の五月十日から十八日までの八日間、京都周辺に遊んでいる。十六日付の「日記」に少し気になる記事を見つけた。「午後一時三十分の汽車で神戸を出発、京都へきた。四時前についた。林久男君がきていた。三人で、谷村という人の家を訪う。「仏陀と幼児の死」を買いそろえていた。新村博士および夫人はじつに感じのいい人だ。「土の子供」（園池、西、新村夫人、関嬢、折口教授、成瀬教授）、「二十一房」（有島、殺人）故買（原）、新聞記者（野村）、教師（関）、重役（ぼく）看視（新村博士）、その他チエホフの「犬」を林君、野村君、新村夫人がやった。非常に感銘の深い会であった。（京都へきた。脚本朗読会へ出席。）」（二

重傍線筆者) 二重傍線を施した部分の「折口教授」とはもしや折口信夫のことではあるまいか。但し残念なことに裏付けがとれないのだ。(註11) 折口の「年譜」類には大正九年五月の京都市の記録はなく、また折口が国学院大学で「教授」に昇格するのは翌々年の九月のことであり、この時点ではまだ「臨時代理講師」の分際でしかなかった。(後者については秋田雨雀の誤解によるものかもしれないが、前者については事実の裏付けを急ぎたい。)

大正九年の段階で新村出を介して秋田雨雀と折口信夫の間に面識(あるいはそれ以上の関係)があったとすれば、十一年に開講されることになる折口の万葉集講座に北野をいざなつたのは雨雀その人であつたかもしれないという可能性も出てくる。北野はその人脈形成において相当雨雀のネットワークの恩恵を蒙っている。佐藤誠也や佐々木孝丸などの演劇仲間はもとより、晩年に至るまで北野と交際の続いた詩人・福士幸次郎なども秋田を介して知り合いになつたものと思われる。折口信夫ともこの雨雀を通して知り合いになつた

としても何の不思議はないわけである。折口の大正九年五月の京都市の事実が摺めれば核心に一步近づけるのだが…。

註

7 長女巴児は大正六年七月三日に誕生している。

8 早稲田大学校友会発行「会員名簿 索引篇」(平成二年度版)に「北野文次郎/博美」の氏名記載はなし。つまり北野は早稲田大学の卒業生ではない。保坂達雄は「折口信夫と北野博美」(『國文學—解釈と教材の研究—』97・1)で「(北野は)早稲田大学を卒業したらしい」と推測するが、それは誤り。また早稲田大学教務部学籍課に「北野文次郎/博美」の早稲田大学在籍の有無の調査を依頼したが「(1) 大学部文学科(各科) 学籍簿 : 大正5~9年 (2) 大学部文学科(各科) 成績簿 : 明治45年~大正4年 (3) いろは名簿(大学部、研究科、専門部、高等師範部、聴講生) : 明治38年~大正8年 (5) 得業生名簿 : 明治43年~大正7年 (5) 府県別名簿 : 明治45年~大正7年 (6) 研究科学籍簿 : 大正2年~7年」を調査資料の範囲」として「該当者は見当たりません。」との回答を受けた。北野博美は早稲田大学に在籍していなかったようである。

9 「反逆の子は語る」(第一巻第二号 大九・十「恋になるまで」(第一巻第三・四号 大九・十一・十二) 「彼女と三人の青年」(第二巻第一号 大十・一) 「北野つゆ香」の筆名で発表。

10 「大正八年頃、『女性日本人』が創刊された時、菅原氏はその編集を担当した。この婦人雑誌へは私も少しばかり寄稿した。『広瀬千香』(山中笑翁片影)『山中共古ノト』第一集(私家版 昭和48)

11 「新村出全集」で見える限り折口との関係は昭和初期まで遡ることができ、昭和三年 折口より『寓話詩』なる本を寄贈さる。(全集第七巻) 昭和五年八月初旬 国学院大学夏期講座に北原白秋とともに招かれ万葉集の話をする。(全集第十三巻) 二人は柳田国男を介して知己になつたものと思われる。昭和18年には折口が会長を務めた「芸能学会」の名譽会員に柳田国男、笹川種郎らとともに推挙されている。(「芸能」昭和18・5「芸能学会資料・役員氏名」) 「成瀬教授」とは新村との付き合いがあつたドイツ文学者成瀬無極のこと。佐々木孝丸「風雲新劇志」(34ページ)に「その前年(大正九年)の春に、秋田さんは関西方面へ講演に招かれ、その途次、京都で『カメレオンの会』という脚本朗読の会に列席して(中略) 新村出博士や成瀬無極氏、それに、そのころ同志社大学でイブセンの連続講義をしていた有島

武郎さんなどという、錚々たる顔触れで、そのときには、チエホフの『犬』と、秋田さんの『二十
一房』とが朗読されたそうだ。」とあることから
明らか。